

REGRET THINK, KNOW のあとの complementizer ”that” について

名本, 幹雄

<https://doi.org/10.15017/61>

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 2, pp.13-19, 1975-02-10. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン：
権利関係：

REGRET, THINK, KNOW のあとの complementizer “that” について

名 本 幹 雄

On the complementizer “that” following the verbs,
REGRET, THINK and KNOW

Mikio Namoto

1. はじめに

Hornby の Verb Pattern 11 は動詞の目的語として *that* 節を従えるものである。¹⁾ この動詞型で接続詞の *that*, すなわち complementizer “that” はしばしば省略される。Bryant によれば大衆雑誌の811例中474例に *that* が使われ、一方会話文では *that* のない例とある例が185対93であるのに、非会話文では115対325であったといわれる。²⁾ *that* の省略は、書きことばより、話しことば、堅い表現よりくだけた表現に多いといわれる。この現象は多くの学者によって指摘されている。本稿では動詞 *regret*, *think*, *know* に焦点をあて、*that* の省略を統語論的、意味論的に考察しようとするものである。Fowler によれば³⁾, Hornby の動詞型11に属する *think* は接続詞 *that* を普通とらず、*know* は文脈の調子によりとったりとらなかったりする。*regret* は普通この *that* をとる。

2. REGRET について

The Kiparskys によれば *regret* は factive predicate である⁴⁾。factive predicate として次の諸性質を持つ。

Sentence I regret *that* John is ill.

- (1) *that* John is ill に the fact をつけたり *that* John is ill を動名詞構文で置換できる。

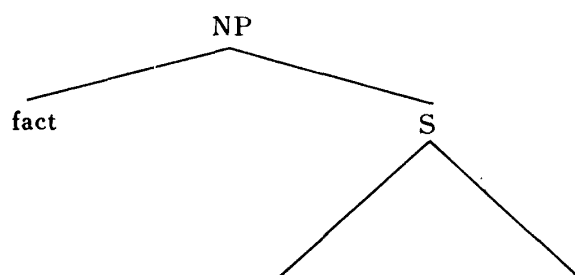
I regret the fact *that* John is ill.

I regret the fact of John’s being ill.
I regret John’s being ill.

- (2) John is ill で表わされた命題が真であることを前提とする。これは主文を否定すると明瞭である。

I don’t regret *that* John is ill.

- (3) 深層構造は次のようなものである。



I regret [_{NP} the fact [_S John is ill]]

- (4) 目的語が *it that* S という形で表わされることがある。

I regret *it that* John is ill.

- (5) 目的語として *it* をとることができるが、*so* はとることができない。

John regretted *that* Bill had done it,
and Mary regretted *it/so**, too.

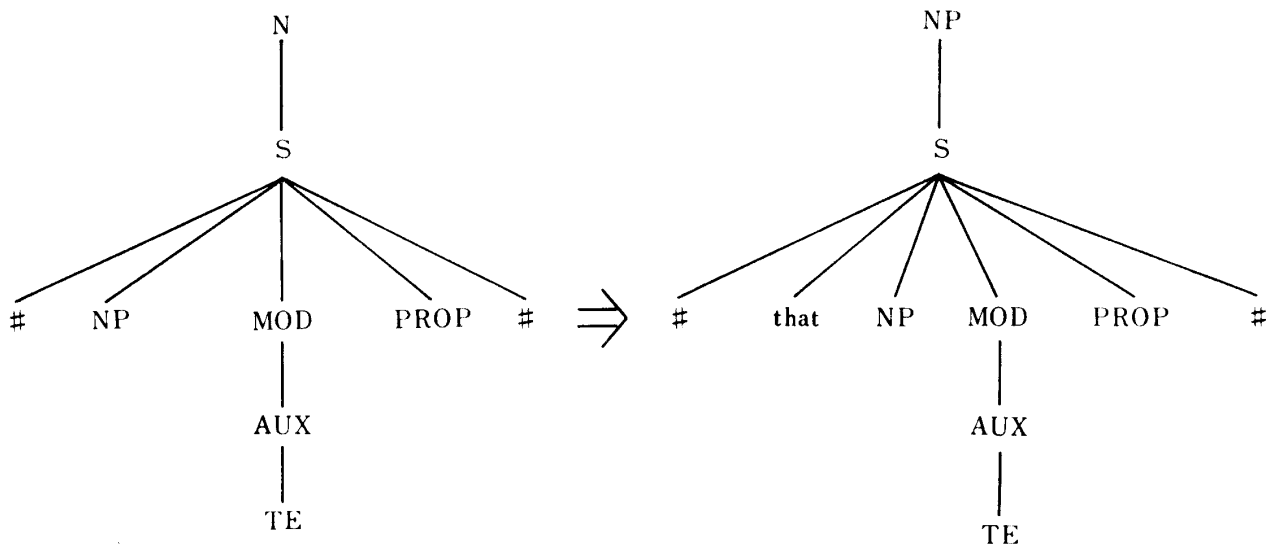
- (6) neg-raising transformation が適用できない。

I regret *that* he can't help doing things like that.

*I don't regret *that* he can help doing things like that.

上記の諸性質特に regret の補文である *that*-clause に同格の名詞節を作る the fact をつけたり、また“動作”または“状態”が具体的に行なわれた（または行なわれている）事実を伝える動名詞構文で置換したり、前に話題になったことに言及する照応代名詞の it で受けたり、目的語として it をとったりすることのできるのは、この *that*-clause が名詞句型の意味内容を持っていることを証明する。しかも regret の場合この名詞句の内容を客観的事実として認識し、それに対する態度を示す「感情を表わす」動詞である。ちなみに regret の意味は、S. O. D.によれば、1. To remember, think of (something lost), with distress or longing; to feel (or express) sorrow for the loss of (a person or thing). 2. To grieve at, feel distress on account of (some event, fact, action, etc.) である⁵⁾。つまり「John が John 自身にとって望ましくない事態におちいる」という客観的事実が I regret *that* John is ill という場合には前提として存在する。これは regret の補文が factive clause であることも一致する。次に complementizer “*that*”, すなわち接続詞 “*that*” について検討してみよ

1. Schematic of THAT-INSERT



う。Jespersen が指摘するように、この *that* は歴史的には元来次に来る節をさす指示代名詞であった⁶⁾。指示代名詞は、前に出た語・句・節、あるいは前後の関係からそれとわかるものをはっきりとさし示す代名詞をいう。はっきりと具体的に物をさす *this*; *that* はその代表的なものである。*this* は時間的・空間的・心理的に近いものをさし、*that* は遠いものをさすといわれる。このような *that* の持つ指示代名詞としての、はっきりと具体的に物を指す性質が regret の補文の持つ名詞的客観的事実を一層目立たせることになる。このような性格の *that* は省略することはむずかしいといえよう。また regret の補文をなす *that*-clause に the fact をつけ加えることができる言語事実注目してみよう。この構造はいわゆる Ross のいう文名詞構造であり⁷⁾、それら全体が単一の名詞句の働きをするものである。しかも文名詞は [+Abstract] という素性を持つ。この素性はそのあとの補文とも共有である。このような名詞句として機能するという事は、regret のあとの *that*-clause が名詞句型の意味内容を持つことを更に実証するものといえる。しかもこの同格の名詞節を導く *that* は省略できない。この省略不可能という事実は、regret の補文をなす *that*-clause の *that* が省略できにくいことの一つの要因をなしているのではなからうか。Stockwell は THAT-INSERTION RULE として次の提案をしている⁸⁾。

2. Rule of THAT-INSERT

S. I. $X^{NP} [S [\# NP^{AUX}] TE X$
 1 2 3

S. C. Attach that as right sister of 2
 Condition: The rule is optional

この rule は optional というだけでは不十分であろう。regret の補文の観察結果から、that を必要とする意味的条件を整備することが望まれる。

3. THINK について

The Kiparskys によれば、think は non-factive predicate である⁹⁾ non-factive predicate として次の諸性質を持つ。

Sentence I think (that) John is ill.

(1) (that) John is ill に the fact をつけることができないし、(that) John is ill を動名詞構文で置換することができない。

*I think the fact that John is ill.

*I think the fact of John's being ill,

*I think John's being ill.

(2) subject-raising transformation が適用できる。

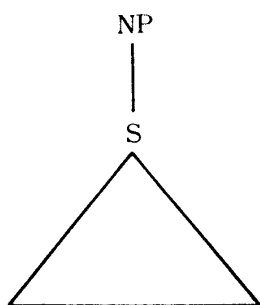
I think (that) John is ill.

I think John to be ill.

(3) John is ill で表わされる命題が真であることを前提としない。これは主文を否定することによって明瞭になる。

I don't think (that) John is ill.

(4) 深層構造は次のようなものである。



I think [NP [S John is ill]]

(5) 目的語に it that S という形をとることができない。

*I think it (that) John is ill.

(6) 目的語として it をとることができず so のみをとる。

I think (that) John is ill, and Mary thinks so, too.

(7) neg-transformation が適用できる。

I think (that) John is ill.

I don't think (that) John is ill.

(8) 時制の一致の法則は think の補文をなす that-clause においては obligatory である。

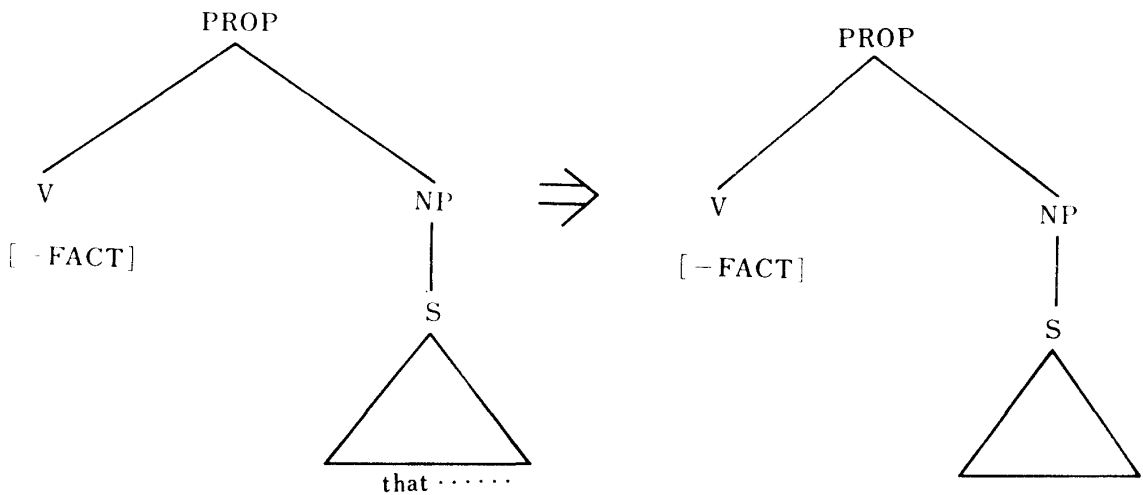
I thought (that) John was (*is) ill.

think の補文をなす that-clause に the fact がつかないということは、文名詞の素性の一つである [+Abstract] が補文に存在しないことになる¹⁰⁾ 文と文名詞は [+Abstract] を共有しているからである。換言すれば think のあとの補文が完全に名詞型の意味をなしていないのではなからうか。中島文雄氏も that-clause が完全に Nominal として機能しているあいだは that の省略はおこらないが、that-Clause が Unspecified it の Complement として機能するときは、Optional Deletion がおこると指摘している¹¹⁾。筆者も think のあとの that-clause は、本質的には副詞的なものであることを指摘した¹²⁾。"動作" または "状態" が具体的に行なわれた (または行なわれている) 事実を伝える動名詞構文が不可能であるということも、think のあとの補文の性質をよく物語っているといえよう。think it that S の構造がとれないということ、つまりこの it がとれないということは、it がすでに話に出されたことに言及する照応代名詞であることを考える時、動詞 think の意味的性質、およびそのあとに続く補文の内容が理解できる。ちなみに think の意味

は、A. H. D.によれば、*To have as a thought, formulate in the mind* であって¹³⁾、いかなる事実性とも無関係な中性的思考内容を示すものである。次に *subject-raising* が可能であるということは、*think* の補文が Tense も Modal も具体化していないと解釈できる。不定詞構文は Tense, Modal を明確にしないからで

ある。*that*-clause が独立文として考え得るのは、Tense, Modal が具体化して存在するからである。このような考察をすすめてくると *think* のあとの補文をなす *that*-clause に *that* がとりにくい理由が明らかになってくる。Stockwell は THAT-DELETION について次の提案を行なっている¹⁴⁾。

1. Schematic for THAT-DEL



2. Rule for THAT-DEL

S. I. X PROP [V NP S] that X
 [-FACT]
 1 2 3

S. C. Erase 2.

この rule は動詞 *think* については適用できるが、*non-factive verb* でも *that* をとる *agree*, *learn* 等には適用できない。もっともこの rule は optional に *that* を削除する訳であるから全く事実にはそぐわないとは言えないかも知れないが、V が [-FACT] という素性を持つ場合という規定だけでは不十分であろう。*agree* の場合は Bolinger が指摘するように¹⁵⁾、*agree* の補文をなす *that*-clause の意味内容に賛成、是認を示す場合である。彼はこのような意味内容を動詞が持つ場合 *that* が必要であるとして次の例をあげている。

He didn't approve *that* the two kids we had hired were so young.
I accept *that* he was telling the truth.
Nobody can blame them *that* they felt that way.

これは前述の THAT-DEL Rule が不十分であることを示すと同時に、意味的要素によって *that* の有無が決定されることを示すなんらかの rule が必要であることを示すものといえよう。

4. KNOW について

Stockwell によれば、*know* は semantically には *factive predicate* であるが、*syntactically* には *non-factive predicate* である¹⁶⁾。まず *know* の意味的、統語的特徴を検討してみよう。

Sentence I know (*that*) John is ill.

(1) (*that*) John is ill に the fact をつけたり, (*that*) John is ill を 動名詞構文で置換できない。

*I know the fact *that* John is ill.

*I know the fact of John's Being ill.

*I know John's being ill.

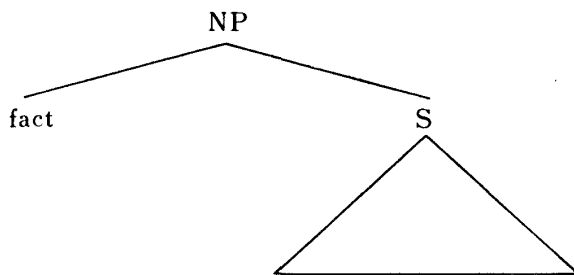
(2) subject-raising transformation が適用できる。

I know (*that*) John is ill.

I know John to be ill.

(3) John is ill で表わされる命題が真であることを前提とする。

(4) 深層構造は次のようなものである。



I know [_{NP} the fact [_S John is ill]]

(5) 目的語に it that S という形をとることができない。

*I know it (*that*) John is ill.

(6) 目的語として it をとる。

I know (*that*) John is ill, and Mary knows *it*, too.

(7) neg-transformation が適用できない。

I know (that) John is not ill.

*I don't know (*that*) John is ill.

(3)(4)(6)(7)は factive predicate の, (1)(2)(5)は non-factive predicate の性質である。これらの事実 は 動詞 know が semantically には factive predicate であり, syntatically には non-factive predicate である複雑な性格をよく物語るものといえよう。ではこのような複雑

な性格を持った know のあとの補文に *that* が存在するかしないかでどのような意味上の相違が表われるだろうか。Bolinger が興味ある事実を指摘している¹⁷⁾。

We might say that *that* with message verbs provides a link-up with a real or implied information question.

This appears all the more likely in the strangeness of *that* with *know* and a few other verbs in clauses where information is repeated. *A* says to *B*, *It's raining*; *B* replies, irritated at the obviousness of the remark, *I know it's raining* or *John just told me it's raining*. On the other hand, *that* is normal, though not required, in an exchange like this: *What do you know?*—*Well, I know that it's raining and I can't go out, and I know several other things too.* Another bit of evidence, also with *know*, is in situations where it would be tactless to offer an answer as purely informative. If a husband is asked *Do you love me?* and replies *You know that I do*, his words sound argumentative— he is answering the question; but if he replies *You know I do* he is affirming the fact.

Bolinger によれば, know のあとの補文に *that* がある場合は, 意味上 real or implied information question となんらかの "つながり" があることになる。つまり Fowler のいう文脈の調子による *that* の有無は, Bolinger では意味上の相違にもとづくものである。では何故 *that* は real or implied information question と "つながり" がある場合に know のあとに表われるのであろうか。know の普通の意味は結果として「知っている」という状態である。「知っている」という状態は「知ろうとして知った」のか「いつのまにか知った」のかわかりにくい場合が多い。つまり意志や関心が働いているかどうか判別しにくい。しかもその「知っている」内容は fact, truth として知られている

ことがはっきりしているものである¹⁸⁾。したがってそのような *fact, truth* をただ「知っている」と述べる場合には、*Demonstrative* なまた *Anaphoric* な *that* は必要ないであろう。深層構造には *fact* があっても表層構造において、*the fact that John is ill* が好まれないのも、*the fact that* が意味上 *redundant* な感じをあたえると *native speaker* が指摘するように、*know* の意味的性質によるものと考えられる。*John* が病気であるという「真実として知られている」ことをただ「知っている」というのに *the fact that* をつければいささかオーバーな表現になるのであろう。また動名詞構文が好まれないのも、大体 *the that that John is ill* 構文が好まないのと同様のことがいえると考えられるが、安井稔氏¹⁹⁾、Menzel, Newmeyer²⁰⁾ の諸氏が指摘するごとく、動名詞の分析が現在不十分であるので、更に他日考察をすすめる必要がある。動名詞の *noun-head* として *fact* 以外に *act, action, activity, state, event, manner, extent, degree* があるという指摘は興味ある正しい指摘といえよう。次に *that* のある場合を考えてみよう。W. L. Chafe によれば²¹⁾、質問はいろいろ種類が違っていても話し手が聞き手にことばによる応答をさせる意図をもって発話し、*say* (言う) *tell* (話す) などのような動詞の命令形を使わないでそうするという点で共通しているという。つまり質問は特別な種類の要請であって命令にすこし似た性格を持っているという。この要請、命令に対して *know* を使用して答える場合 *Demonstrative* な *Anaphoric* な *that* が表われるのは当然のように思われる。

5. おわりに

Verb+that-clause の構文において、*Complementizer "that"* は口語や平易な散文、詩では表現されない。いかなる動詞のあとで表現されるか、されないかは文の口調により、また個人的傾向もあって判然としない²²⁾。Bolinger が *that's that* において²³⁾、この *that* の有無に *semantic distinction* のあることを指摘してい

るが、彼自らが認めているように十分な論証とはいえない。この小論はこの問題解明の一步として動詞、*regret, think, know* をとりあげ、各々の動詞の持つ意味的、統語的性質、*complementizer "that"* の持つ諸性質ならびにその補文をなす *that-clause* の意味的、統語的性質を検討してみた。その結果 *that* の有無の決定には、動詞、補文をなす *that-clause, complementizer "that"* の意味的、統語的諸性質が密接に関係していることが明らかになった。しかしこれら三つの動詞は、(1) *that* を普通とする動詞、(2) *that* を普通とらない動詞、(3) いずれの場合もあるもの、これら三種類の動詞の中から各々代表的と思われるものを一つずつ選んで検討したにすぎない。*complementizer "that"* の有無を決定する *rule* を見出すには、更に多くの動詞を検討してみる必要のあることはいうまでもない。それは今後の課題としたい。

おわりに有益な助言をいただいた九州大学文学部大江三郎教授に感謝いたします。

(1974年10月)

文 献

注

- 1) Hornby, A. S., 岩崎民平 註訳, 昭和 35 年: *A GUIDE TO PATTERNS & USAGE IN ENGLISH*, 研究社, 東京, p. 76.
- 2) 大塚高信, 小西友七, 1973: *SANSEIDO'S DICTIONARY OF CURRENT ENGLISH USAGE*, 三省堂, 東京, pp. 912—913.
- 3) Fowler, H. W. 1965: *A Dictionary of Modern English Usage*, Oxford (Clarendon Press) p. 624.
- 4) Kiparsky, p. and C. Kiparsky., 1971: "Fact" *SEMANTICS*, ed. Steinberg and Jakobovits, Cambridge, pp. 345—369.
- 5) Fowler, et al., 1970: *The Shorter Oxford English Dictionary*.
- 6) Jespersen, O. 1961—1965: *A Modern English Grammar on Historical Principles*, III. Heidelberg (Winter), London (Allen), Copenhagen (Munksgaard), pp. 33—34.
- 7) 橋本二郎, 1972: 『英語学』第 8 号, 「英語における文名詞構造について」開拓社, 東京, pp. 60—71.

- 8) Stockwell, Schachter and Partee (eds), 1973 : *The Major Syntactic Structures of English* Holt, Rinehart and Winston, Inc. pp. 580—581.
- 9) Kiparsky, p. and C. Kiparsky, *op. cit.*, pp. 345—369.
- 10) 橋本二郎, *op. cit.*, pp. 60—71.
- 11) 中島文雄, 1968 : “基底文における Unspecified *it* ” 英語青年, Vol. CXIV. No. 6. pp. 378—380.
- 12) 名本幹雄, 1972 : “THINK のあとの THAT 構文について” 水産大学校研究報告, 第20巻, 第3号. pp. 191—196.
- 13) Morris, W., 1969 : THE AMERICAN HERITAGE DICTIONARY OF THE ENGLISH LANGUAGE. New York.
- 14) Stockwell, et al., *op. cit.*, p. 599.
- 15) Bolinger, D. 1972 : *THAT'S THAT, MOUTON, THE HAGUE, PARIS.* p. 44.
- 16) Stockwell, et al., *op. cit.*, p. 537.
- 17) Bolinger, D. *op. cit.*, p. 61.
- 18) 大江三郎, 1969 : “think と know のあとのうめこみ文” 青語青年, Vol. CXV. —No. 12. pp. 768—770.
- 19) 安井稔, 1973 : 『英語学』第10号. “動名詞の解体と再構” 開拓社. 東京. pp. 2—24.
- 20) Stockwell, et. al., *op. cit.*, p. 564.
- 21) Chafe, W. L. 1970 : *Meaning and the Structure of Language.* Chicago. The Univ. of Chicago Press.
- 22) 八木林太郎, 1967 : 『副詞・接続詞・間接詞』(英文法シリーズ17) 研究社. 東京. p. 73.
- 23) Bolinger, D. *op. cit.*, p. 68.